自著と
その周辺

すこしは独自なメッセージ
わたしのエッセイ・スピーチ集

著者：小川秋實

信濃毎日新聞社
340ページ
2019年８月１日発行
定価：1,000円＋税

執筆依頼されたエッセイと会合でのスピーチから抜粋した文章を，発表順ではなく，テーマごとに分類して収載した。発表時の文章なので，回顧録でも記念誌でもない。35年以上前の文章もあるが，大多数は医学部長に就任以降に発表したもの。テーマは，医療と健康をめぐる話し，メス持つ医者の想い，大学と教育のこと，若人への言葉，遠慮ない提言，日本語へのこだわり，国際交流，親しき人々のこと，自叙伝，ロータリークラブでの談話などで，90余話。エッセイは掲載誌から許可を得て転載，スピーチは事前に書いた原稿を載せた。スピーチ原稿は，会場へ持っていかないので，実際に話したこととは必ずしも一致しない。

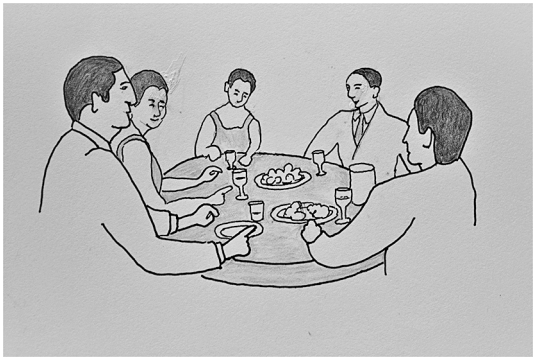
スピーチでもエッセイでも，ありふれたことを長々と聴かされたり，読まされたりすると退屈する。これに対し，話に何か独自な点があると，聴く気，読む気になる。それも，できるだけ短いほうがよい。そのうえ，聴いたり読んだりした後に，信州の空気のように，さわやかさを感じるなら申し分がない。これを目指して，話したり書いたりしてきたので，本冊子のなかに，そのような文章があると感じていただければ嬉しい。

本冊子を通して伝えたいことがいくつもある。日本語は，あいまいな言葉を述べ，口調や表情などで真意を察してもらうことが少なくない。この「察しの文化」は，和を尊ぶ日本社会の特徴といえるが，国際的には通用しない。国際貢献するには，意見を率直に述べ，議論することが不可欠である。

同じ日本語を使っても，エッセイとスピーチでは使う言葉を違えたほうがよい。日本語には発音は同じだが意味が異なる言葉（同音異義語）が多い。たとえば，発音が「カンショウ」なら，鑑賞，干渉，勧奨，管掌などを指す。スピーチでこのような言葉を聞くと，どの意味かと考えるので，そのあとの話しが頭に入らないことがある。これを避けるには，スピーチでは同音異義語や紛らわしい言葉を使わなければよい。他方，書き言葉では，意味が瞬時に分かる漢字言葉が使えるので，豊かな表現ができる。

この冊子用に元の文章を集めるさいに，いささか手間がかかった。パソコンのない時代のエッセイは，掲載誌の文章をパソコンの「読み取りソフト」でファイルにした。古いワープロで書いた文章も同様に処理した。原稿の整理がほぼできたときに，何の予兆もなくパソコンが壊れた。販売店やメーカーにデータの取り出しを頼んだが，不可能との返事。コンピューターに詳しい知人が特別な業者にハードディスクの読み取りを依頼してくれ，費用がかかったが，データを復元することができた。パソコンを使うなら，必ずバックアップを取るべきことを学んだ。

挿画は，手元にあったスナップ写真から約20枚をイラストにしたもの。子供のころから，絵を描くのが好きで，学生時代は絵画クラブに属し，デッサンや油絵を描いていた。そのようなことから，本冊子の挿画は，私の描いたイラストを使った。このイラスト描きは楽しい時間だった。



表紙のイラストは，「教授会後の懇談会」。医学部長や学長のとき，会議の後は酒を楽しみながら，懇談するのを常とした。日本の「察しの文化」では，これが分かり合えるために役立った。左下のイラストは，「医師宅での夕食会」。海外で知り合った人に自宅に招かれることは，海外生活で最も嬉しいことの一つ。いつまでも記憶に残る。

（信州大学名誉教授　小川秋實）